

ひこうかばん

DEN FLYVENDE KOFFERT

ハンス・クリスティアン・アンデルセン Hans Christian Andersen

青空文庫

むかし、あるとき、お金持のあきんどがありました。どのくらいお金持だといって、それは町の大通のこらず銀貨で道をこしらえて、そのうえ横町の小路こうじにまでそれをしきつめて、それでもまだあまるほどのお金を持っていました。でも、このあきんどは、そんなことはしません。もつとほかにお金をつかうことをかんがえて、一シリングだせば、一ターレルになつてもどつてくる工夫をしました。まあ、そんなにかしいあきんどでしたが――そのうち、このあきんども死にました。

そこで、むすこが、のこらずのお金をもらうことになりました。そうしてたのしくらしめました。毎晩、仮装舞踏会かそうぶとうかいへでかけたり、お札さつでたこをはつてあげたり、小石の代りに、金貨で海の水を打つてあそんだりしました。まあこんなふうにすれば、いくらあつても、お金はさつさとにげていつてしまうでしょう。とうとうむすこはたった四シリングの身代しんだいになつてしまいました。身につけているものといつては、うわぐつ一足と、古どてらのねまきのほかに、なにもありません。こうなると、友だちも、いっしよに往来をあらくことをきまりわるがつてまるでよりつかなくなりました。でもなかでひとり、しんせつな友だちがいて、ふるいかばんをひとつくれました。かばんのうえには、「これにな

かおつめなさい。」とかいてありました。いやどうもこれはたいへんありがたいことでした。けれど、あいにくなにもつめるものがないので、むすこはじぶんがそのかばんのなかにはいつていました。

ところが、これが、とんだとぼけたかばんでした。錠前をおすといつしよに、空のうえにまい上がるのです。ひゆうツ、さつそく、かばんはひこうをはじめました。ふわりふわり、かばんはむすこをのせたまま、煙突の穴をぬけて、雲をつきぬけて、とおくへとおくへとんでいきました。でも、かばんの底が、みしみしいたんびに、むすこは、はらはらしました。途中でばらばらになって、空のうえからまっさかさまに木の葉落しということになったら、すばらしいどころではありません。やれやれこわいこと、まあこんなふうにして、むすこは、トルコの国までいきました。そこでかばんを、ひとまず、森の落ち葉のなかにかくして、町へけんぶつにでかけました。けっこう、そのままのなりでね。なぜなら、トルコ人なかまでは、みんながこの男とおなじように、どてらのねまきをひきずって、うわぐつをはいていましたもの。ところで、むすこがきよろきよろしながらあるいていきますと、むこうから、どこかのばあやが、こどもをつれてくるのにであいました。

「ねえもし、トルコのばあやさん。」と、むすこはたずねました。「この町のすぐそとに



ある大きなお城はどういうお城ですね。ずいぶん高い所に、窓がついていますね。」

「あれは、王さまのお姫さまのおすまいです。」と、ばあやがこたえました。「お姫さまは、お生まれになるさつそく、なんでもたいへん運のわるいおむこさんをおむかえになるという、いやなうらないがたものですから、そのわるいおむこさんのよりつけられないように、王さまとお姫さまがごいっしょにおいでよのときのほか、だれもおそばにいけないですよ。」

「いや、ありがとう。」

むすこはこういって、また森へもどっていきました。そうして、すぐかばんのなかにはいると、そのままお城の屋根のうえへとんでいって、お姫さまのおへやの窓からそつとなかにはいりました。

お姫さまは、ソファのうえで休んでいました。それが、いかにもうつくしいので、むすこはついキスしずには、いられませんでした。それで、お姫さまは目をさまして、たいそうびっくりした顔をしました。

でも、むすこは、こわがることはない、わたしは、トルコの神さまで、空をあるいて、わざわざやって来たのだといいますと、お姫さまはうれしそうにっこりしました。

ふたりはならんで腰をかけて、いろんな話をしました。むすこはまず、お姫さまの目のことを話しました。なんでもそれはこのうえなくきれいな黒い水をたたえた、ふたつのみずうみで、うつくしいかんがえが、海の人魚のように、そのなかでおよぎまわっているというのです。それから、こんどはお姫さまの額ひたいのことをいって、それは、このうえなくりっぱな広間と絵のある雪の山だいいいました。それから、かわいらしい赤ちゃんをもってくるこのとりのことを話しました。

そう、どれもなかなかおもしろい話でした。そこで、むすこは、お姫さまに、わたしのおよめさんになってくださいといいました、お姫さまは、すぐ「はい。」とこたえました。「でもこんどいらつしやるのは土曜日にしてくださいますわ。」と、お姫さまはいいいました。「その晩は王さまとお妃さまきでさまがここへお茶においでになるのですよ。わたしそこでトルコの神さまとご婚礼するのよといって上げたら、おふたりともずいぶん鼻をたかくなさるでしょう。でも、あなた、そのときはせいぜいおもしろいお話をしてあげてくださいましね。両親とも、たいへんお話ずきなのですからね。おかあさまは、教訓のある、高尚なお話が好きですし、おとうさまは、わらえるような、おもしろいお話が好きですわ。」

「ええ、わたしは、お話のほかには、なんにも、ご婚礼のおくりものをもってこないこと

にしましょう。」と、むすこはいいました。そうして、ふたりはわかれしました。でも、わかれぎわに、お姫さまは剣をひとふり、むすこにくれました。それは金貨でおかざりがしてあつて、むすこには、たいへんちようほうなものでした。

そこで、むすこはまたとんでかえつていつて、あたらしいどてらを一枚買いました。それから、森のなかにすわつて、お話をかんがえました。土曜日までにつくっておかなければならないのですが、それがどうしてよいなことではありませんでした。

さて、どうにかこうにか、お話ができ上がると、もう土曜日でした、

王さまとお妃さまと、のこらずのお役人たちは、お姫さまのところで、お茶の会をして待つていました。むすこは、そこへ、たいそうていねいにむかえられました。

「お話をしてくださるそうでございますね。」と、お妃さまがおっしゃいました。「どうか、おなじくは、いみのふかい、ためになるお話が伺いとうございます。」

「さようさ。だが、ちよつとはわらえるところがあつてもいいな。」と、王さまもおっしゃいました。

「かしこまりました。」と、むすこはこたえて、お話をはじめました。そこで、みなさんもよくきくことにしてください——

『さて、あるとき、マツチの束たばがございました。そのマツチは、なんでもじぶんの生まれのいいことをじまんにしていました。けいずをただすと、もとは大きな赤もみの木で、それがちいさなマツチの軸木じゆくぎにわられて出てきたのですが、とにかく、森のなかにある古い大木ではありました。ところでマツチはいま、ほくち箱とふるい鉄なべのあいだに坐っていました。で、こういうふうに、若いときの話をはじめました。マツチのいうには、

「そうだ、わたしたちが、まだみどりの枝のうえにいたときには、いや、じつさい、みどりの枝のうえにいたのだからな。まあ、そのじぶんは毎日、朝と晩に、ダイヤモンドのお茶をのんでいた。それはつまり、露のことだがね。さて、日がでさえすれば、一日のどかにお日さまの光をあびる、そこへ小鳥たちがやって来て、お話をしてきかせてくれたものだ。なんでも、わたしたちがたいそうなお金持だったということはよく分かる。なぜなら、ほかの広い葉の木たちは、夏のあいだだけきものを着るが、わたしたちの一族にかぎって、冬のあいだもずっと、みどりのきものを着つづけていたものな。ところが、ある日、木こりがやってきて、森のなかにえらい革命かくめいさわぎをおこした、それで一族は、ちりぢりばらばらになってしまった。でも、宗家そうけのかしらは第一等の船の親柱に任命されたが、その船はいつでも世界じゅう漕こぎまわれるというりっぱな船だ。ほかの枝も、それぞれの職しよく

場^ばにおちついている。ところで、わたしたちは、いやしい人民どものために、あかりをともしてやるしごとを引きうけた。そういうわけで、こんな台所へ、身分のあるわれわれが来たのも、まあはきだめにつるがおりたというものだ。」

「わたしのうたう歌は、すこし調^{ちようし}子がちがつている。」と、マツチのそばにいた鉄なべがいました。「わたしが世の中に出て来たそもそもから、どのくらい、わたしのおなかで煮たり沸かしたり、そのあとたわしでこすられたか分からない。わたしは徳用でもちのよいことを心がけているので、このうちではいちばんの古参^{こさん}と立てられるようになった。わたしのなよりのたのしみは、食事のあとで、じぶんの居場所におさまって、きれいにみがかれて、なかまのひとたちと、おたがいもののわかった話をしあうことだ。バケツだけは、ときどき裏までつれていかれるが、そのほかのなかまは、いつでもうちのなかでくらししている。わたしたちのなかまで新聞種^{だね}の提^{てい}供^{きよう}者は、市場がよいバスケットだ。ところが、あの男は、政府や人民のことで、だいぶおだやかでない話をする。それで、こないだも、古瓶^{ふるがめ}のじいさんが、びつくりしてたなからころげおちて、こなごなにこわれたくらいだ。あいつは、自由主義だよ、まったく。」

「さあ、きみは、あんまりしやべりすぎるぞ。」と、ほくち箱が、くちをはさみました。

そして、火切石にかねをぶつけたので、ぱつと火花がちりました。

「どうだ、おたがいに、おもしろく、ひと晩すごそうじゃないか。」

「うん、このなかで、だれがいちばん身分たかく生まれてきたか、いいっこしようよ。」と、マツチがいました。

「いいえ、わたくし、じぶんのことをとやかく申したくはございません。」と、石のスーブ入がこたえました。「まあ、それよりか、たのしい夕べのあつまりということにいたしてはどうでございましょう。さつそく、わたくしからはじめますよ。わたくしは、じつさい出あったお話をいたしましょう、まあどなたもけいけんなさるようなことです。そうすると、たれにもようにそのばあいがそうぞうされて、おもしろかろうとおもうのでございます。さて、東海は、デンマルク領のぶな林で——」

「いいだしがすてきだわ。この話、きつとみんなおもしろがるわ。」と、お皿たちがいつせいにさけびました。

「さよう、そこのある、おちついた家庭で、わたくしはわかい時代をおくったものでしたよ。そのうちは、道具などがよくみがかれておりましてね。ゆかはそうじがゆきとどいておりますし、カーテンも、二週間ごとに、かけかえるというふうでございました。」

「あなたは、どうもなかなか話じようずだ。」と、毛ぼうきが良かったです。「いかにも話し手が婦人だということがすぐわかるようで、きいていて、なんとなく上品で、きれいな感じがする。」

「そうだ。そんな感じがするよ。」と、バケツがいつて、うれしまぎれに、すこしとび上がりました。それで、ゆかのうえに水がはねました。

で、スープ入は話をつづけましたが、おしまいまで、なかなかおもしろくやってのけました。

お皿なかまは、みんなうれしがって、ちやらちやらいいました。ほうきは、砂穴からみどり色をしたオランダぜりをみつけてきて、それをスープ入のうえに、花環はなわのようにかけてやりました。それをほかの者がみてやつかむのはわかっていましたが、「きよう、あの子に花をもたしておけば、あしたはこっちにくれるだろうよ。」と、そう、ほうきはおもっていました。

「さあ、それではおどるわ。」と、火かきがいつて、おどりだしました。ふしぎですね、あの火かきがうまく片足でおどるじやありませんか。すみっこの古椅子のきれがそれを見て、おなかをきつてわらいました。

「どう、わたしも、花環がもらえて。」と、火かきがねだりました、そうして、そのとおりしてもらいました。

「どうも、どいつもこいつも、くだらない奴らだ。」と、マッチはひとりでかんがえていました。

さて、こんどはお茶わかしが、歌をうたう番でした。ところが風をひいているといつてことになりました。そうしていずれ、おなかでお茶がにえだしたら、うたえるようになると思いました。けれどこれはわざと氣どつていうので、ほんとうは、お茶のテーブルのうえにのつて、りっぱなお客さまたちのまえでうたいたかったのです。

窓のところに、一本、ふるい鷺^がペンがのつていました。これはしじゅう女中たちのつかっているものでした。このペンにべつだん、これというとりえはないのですが、ただインキの底にどっぴりつかっているというだけで、それをまた大したじまんの種^{たね}にしています。

「お茶わかしさんがうたわないというなら、かつてにさせたらいいでしょう、おもての鳥かごには、小夜鳴鳥^{さよなきとり}がいて、よくうたいます。これといって教育はないでしょうが、今晚はいっさいそういうことは問わないことにしましょう。」

すると、湯わかしが、

「どうして、そんなことは大はんたいだ。」と、いいだしました。これは、台所きつての歌うたいで、お茶わかしとは、腹がわりの兄さんでした。「外国鳥の歌をきくなんて、とんでもない。そういうことは愛国的だといえようか、市場がよいバスケット君にはんだんしておもらい申しましょう。」

ところで、バスケットは、おこった声で、

「ぼくは不愉快でたまらん。」といいました。「心のなかでどのくらい不愉快に感じているか、きみたちにはそうどうもつかんだろう。ぜんたい、これは晩をすごすきとうな方法でありましょうか。家のなかをきれいに片づけておくほうが、よっぽど気がきいているのではないですか。諸君は、それぞれじぶんたちの場所にかえつたらいいでしょう。その上で、ぼくが、あらためて司会しかいをしよう。すこしはかわったものになるだろう。」

「よし、みんなで、さわごうよ。」と、一同がいました。

そのとき、ふと戸があきました。このうちの女中がはいって来たのです。それでみんなはきゆうにおとなしくなつて、がたりともさせなくなりました。でも、おなべのなかまには、ひとりだつて、おもしろいあそびをしらないものはありませんでしたし、じぶんたち

がどんなになにかができて、どんなにえらいか、とおもわないものはありませんでした。そこで、

「もちろん、おれがやるつもりになれば、きつとずいぶんおもしろい晩にしてみせるのだからあ。」と、おたがいにかんがえていました。

女中は、マツチをつまんで、火をすりました。——おや、しゅツと音がしたとおもうと、ぱつときもちよくもえ上がったではありませんか。

「どうだ、みんなみろよ。やつぱり、おれはいちばんえらいのだ。よく光るなあ。なんと
いうあかるさだ——」と、こうマツチがおもううち、燃えきってしまいました。』

「まあ、おもしろいお話でございましたこと。」と、そのとき、お妃さまきさきがおつしやいました。「なんですか、こう、台所のマツチのところへ、たましいがはこばれて行くようにおもいました。それではおまえにむすめはあげることになりますよ。」

「うん、それがいいよ。」と、王さまもおつしやいました。「それでは、おまえ、むすめは月曜日にもらうことにしたらよからう。」

まず、こんなわけで、おふたりとももう、うちのものになったつもりで、むすこを、おまえとおよびになりました。

これで、いよいよご婚礼ときまりました。そのまえの晩は、町じゅうに、おいわいのイリュミネーションがつけました。バスケットやケーキが、人民たちのなかにふんだんにまかれるし、町の少年たちは、往來にあつまつて、ばんぎいをさけんたり、指をくちびるにあてて、口笛をふいたりしました。なにしろ、すばらしいけいきでした。

「そうだ。おれもお礼になにかしてやろう。」と、あきんどのもすこはおもいました。そこで、流星花火だの、南京^{ナンキン}花火だの、ありとあらゆる花火を買いこんで、それをかばんに入れて、空のうえにとび上がりました。

ぼん、ぼん、まあ、花火がなんてよく上がることでしよう。なんて、いせいのいい音を立てることでしよう。

トルコ人は、たれもかれも、そのたんびに、うわぐつを耳のところまでけとばして、とび上がりました。

こんなすばらしい空中^{げんしやう}現象を、これまでたれもみたものではありません。そこで、いよいよ、お姫さまの結婚なさるお相手は、トルコの神さまにまちがいなしということになりました。

むすこは、かばんにのつたまま、また森へおりていきましたが、「よし、おれはこれか

ら町へ出かけて、みんな、おれのことをどういつているか、きいてこよう。」とかんがえました。なるほど、むすこにしてみれば、そうおもい立ったのも、むりはありません。

さて、どんな話をしていたでしょうか。それはてんでんがちがつたことをいつて、ちがつた見方をしていました。けれども、なにしろたいしたことだと、たれもいつていました。「わたしは、トルコの神さまをおがんだよ。」と、ひとりがいいました。「目が星のように光つて、ひげは、海のあわのように白い。」

「神さまは火のマントを着てとんでいらした。」と、もうひとりがいいました。「それはかわらしい天使のお子が、ひだのあいだからのぞいていた。」

まったくむすこのきいたことはみんなすばらしいことばかりでした。さて、あくる日はいよいよ結婚式の当日でした。そこで、むすこは、ひとまず森にかえつて、かばんのなかでひと休みしようとおもいました。——ところがどうしたということでしょう。かばんは、まる焼けになっていました。かばんのなかにのこつていた花火から火がでて、かばんを灰にしてしまったのです。

むすこはとぶことができません。もうおよめさんのところへいくこともできません。

およめさんは、一日、屋根のうえにたつて待ちくらししました。たぶん、いまだに待つて

いるでしょう。けれどむすこはあいかわらずお話をしながら、世界じゅうながれあるいていました、でも、マツチのお話のようなおもしろい話はもうつくれませんでした。



青空文庫情報

底本：「新訳アンデルセン童話集第一巻」同和春秋社

1955（昭和30）年7月20日初版発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

入力：大久保ゆう

校正：秋鹿

2006年1月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ひこうかばん

DEN FLYVENDE KOFFERT

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 ハンス・クリスティアン・アンデルセン Hans Christian Andersen

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>